＊：写真短歌」作品）　※1：山形県歌人クラブ第38集年刊歌集出詠（2020年）　※2：同会報74号近詠三首出詠　※3：同第39集年刊歌集出詠（2021年）※4：同第40集年刊歌集出詠（2022年）
※5：同第41集年間歌集出詠（2023年）※6：同第42集年間歌集出詠（2024年）

やましん歌壇掲載歌

毎月一度の投稿を始めて十年目に入り、その間に百七十九首の選歌掲載（月平均掲載率：約1.4首）となっております。それらの中で自身の写真短歌の作品は八十、共同制作の作品は二十二で合計一〇二作品となり歌壇に掲載された短歌の約５７％を占めております。

◎令和六年九月十五日

佐藤幹夫選　腹を見せ横たわりおる落ち蝉に蟻の群がる今日は長崎忌

井上菅子選　雨の止み紅花摘めば恵あり射し込む夕日は彩りの濃き（＊林氏の写真）

◎令和六年七月二十一日

佐藤幹夫選　参道の岩のはざまに祀られる小さき仏に羊歯生い茂る（＊）

井上菅子選　競い鳴く鶯の声掻き消してサイレン響きヘリ飛ぶ高原

◎令和六年六月二十三日

布宮雅昭選　鐘楼を背に群れ咲きし山吹の覆う斜面を風の吹き降る（＊）

◎令和六年五月二十六日

井上菅子選　茎立ちてクリスマスローズ群れており雪解（ゆきげ）に目覚むる眠り姫のごと（＊）

◎令和六年四月十四日

佐藤幹夫選（筆頭三席）人参の蔕を小皿にのせ置きて目をかけ声かけ愉しむ厨

（＊：五十嵐氏の写真）

選評　日あたりの良いキッチン。水栽培で人参の蔕（へた）から葉を伸ばすのか。「目をかけ声かけ」が如何にも楽しそう。再生、持続の意識も歌の底にありそうだ。

布宮雅昭選　山頂で出会いし人らと黙祷す二時四十六分わが東北忌（＊）

◎令和六年三月十七日

佐藤幹夫選　川べりに華やぐような雪の花を自然の妙と見つつ儚む（＊：土田氏の写真）

井上菅子選　築山のにわか仕立てのゲレンデに響く歓声子らの箱ぞり（＊）

◎令和六年一月二十一日

佐藤幹夫選　悔しかり野菜のトマト浮かび来ず認知機能の検査問題（＊）

井上菅子選　花小路のおもかげ求めて秋まつり集える人らは日がな一日（＊：大場氏の写真）

＊：写真短歌」作品）　※1：山形県歌人クラブ第38集年刊歌集出詠（2020年）　※2：同会報74号近詠三首出詠　※3：同第39集年刊歌集出詠（2021年）※4：同第40集年刊歌集出詠（2022年）
※5：同第41集年間歌集出詠（2023年）※6：同第42集年間歌集出詠（2024年）

◎令和五年十一月十九日

井上菅子選　山の峯「天使の梯子」架かりけり一点照射に際立つ秋色　（※6）

◎令和五年十月二十二日

佐藤幹夫選　走りものの無花果求めジャムづくり秋を呼び込む男の厨（＊）（※6）

布宮雅昭選　敗戦を三四半世紀終戦と言い風化する八月十五日（＊）（※6）

◎令和五年九月二十四日

佐藤幹夫選（筆頭一席）　雪渓の融くる流れに手を浸し十秒間の痺れたのしむ（＊）（※6）

選評　大きな雪渓の下を流れ出る水の冷たさ、「十秒間の痺れたのしむ」は夏山の醍醐味。下界の猛暑を忘れ、憂き世を忘れて頂上まであと一息なのだろう。

井上菅子選　ごみを出すわれの先ゆく一匹のあきつに気付く今日広島忌（※6）

◎令和五年八月二十七日

布宮雅昭選　漂える午睡の後の畳の香遠くに微かに郭公の声（※6）

◎令和五年七月十六日

井上菅子選　訪問者の期待の百花に添うがごと綿毛飛び交うオープンガーデン（＊）（※6）

布宮雅昭選　朝の陽の射し込む田の面の水かがみ早苗は帯に浮かび立ちくる（＊：吉田氏の写真）

◎令和五年五月二十一日

佐藤幹夫選　震災の十三回忌を前にして専断されたる原発回帰（※6）

布宮雅昭選　春浅き冷え込む朝の散歩道轍一筋日に煌めけり（※6）

◎令和五年四月二十四日

井上菅子選　凛と立つ白樺の背に青き空大樹の木肌の白の眩しき（＊：三浦氏の写真）

◎令和五年三月二十七日

佐藤幹夫選　雪燃ゆると見紛うばかりゲレンデのライトアップとうごめく松明（＊：岡崎氏の写真）

◎令和五年二月二十七日

佐藤幹夫選　月山道行くも止まるも地獄なり闇夜に加わるホワイトアウト（＊：加藤氏の写真）

＊：写真短歌」作品）　※1：山形県歌人クラブ第38集年刊歌集出詠（2020年）　※2：同会報74号近詠三首出詠　※3：同第39集年刊歌集出詠（2021年）※4：同第40集年刊歌集出詠（2022年）
※5：同第41集年間歌集出詠（2023年）※6：同第42集年間歌集出詠（2024年）

井上菅子選　冬枯れの枝に戯るる山雀に見惚れて憶ふわが幼少期（＊：三浦氏の写真）

◎令和五年一月三十日

佐藤幹夫選　散りてなほ枝に架かりし枯葉らの揺れてあらがふ小春の風に（＊）（※6）

◎令和四年十二月二十六日

佐藤幹夫選　ヴェネツィアの恋人たちの息づかひ不意に湧き出づ古きアルバム（＊）（※5）

井上菅子選　コロナ禍のおくやみ欄に「家族葬」たちまち広がり薄らぐ絆（＊）（※5）

大滝　保選　鳥海の賽の河原に入り日射し尾花の風に揺れて煌めく（＊：吉田氏の写真）

◎令和四年十月三十一日

井上菅子選　落陽と友らとワインと潮騒に自粛の澱の消えゆく晩夏（＊：岡崎氏の写真）

大滝　保選　小鳥らとジューンベリーの収穫を競うも譲る「共生」のため（＊）（※5）

◎令和四年九月十九日

佐藤幹夫選　脱サラしはや十五年の友の茄子いまや手練れの栽培モデル（＊：山田氏の写真）

◎令和四年八月二十二日

佐藤幹夫選　ひたひたと足音聞こゆ改憲の数の揃うを報じるメディア（※5）

井上菅子選　コロナ禍を娘と語る三日間われら夫婦の未来予想図（＊）（※5）

大滝　保選　（筆頭三席）朽ちてなお青空割（さ）きて凛と立つ白骨木（はくこつぼく）は樹林の中に（＊）（※5）

選評　「白骨木」とは樹皮が剥がれて真っ白になった巨大な枯れ木。枯れてもなお威厳と風格を生きた樹林の中で誇示している。上の句に勢いがある。

◎令和四年六月二十七日

佐藤幹夫選　山里の早苗の田の面に映りおる雪斑なる飯豊の山並み（＊：安孫子氏の写真）

井上菅子選　連れ合いと歩みこし日々半世紀はからいささやかコロナ禍の宴（＊）（※5）

大滝　保選　春さなか芽吹く雑木々従えて勇者のごと立つ辛夷の白し（＊）（※5）

◎令和四年五月十六日

佐藤幹夫選　他人ごとと言えぬ歴史ありわが国の百年前の言論統制

大滝　保選　咲き匂う桜の前の老いふたり背に漂えり偕老（かいろう）の日々（＊）（※5）

◎令和四年三月二十一日

井上菅子選　七五三の絵馬の写真を成人の祝いに添える社務所の計らい（＊：林氏の写真）

＊：写真短歌」作品）　※1：山形県歌人クラブ第38集年刊歌集出詠（2020年）　※2：同会報74号近詠三首出詠　※3：同第39集年刊歌集出詠（2021年）※4：同第40集年刊歌集出詠（2022年）
※5：同第41集年間歌集出詠（2023年）※6：同第42集年間歌集出詠（2024年）

大滝　保選　窓開くれば大寒の朝の西空に輝く白き立待の月

◎令和四年二月二十一日

佐藤幹夫選　首失せて寄り添い並ぶ道祖神古道の辺の朽ち葉の海に（＊：森川氏の写真）

◎令和四年一月二十四日

井上菅子選　風が凪ぎさざ波消ゆる杜の池逆さ紅葉の綾錦なる（＊）（※5）

◎令和三年十二月二十日

佐藤幹夫選　冬立ちて霜の朝の蜘蛛の巣は星をかたどり過客を癒す（＊：黒田氏の写真）

◎令和三年十一月八日

大滝　保選　一条の縄で括られしんと立つ夕光（ゆうかげ）の射す墓じまいの石（＊）（※4）

◎令和三年十月十八日

井上菅子選　ゆく夏を惜しむがごとく鳴き頻る蝉と迎うる敗戦忌の昼（※4）

◎令和三年九月二十日

大滝　保選　一匹の車窓の飛蝗に甦りふと口遊さむ「いまはもう秋」（＊：兼子氏の写真）

◎令和三年八月二十三日

佐藤幹夫選　熊避けの鈴の音近づき遠ざかるいつもの山路いつもの挨拶（＊）（※4）

井上菅子選　咲き揃う我が家の貌の夏椿しのつく雨に濡れそぼち立つ（＊）（※4）

◎令和三年六月十五日

佐藤幹夫選　ふる里の伝承絶えし獅子頭設ふ古祠に父の面影（＊：畠中氏の写真）

井上菅子選　うぐいすの初鳴き届きおずおずと目覚むる朝はコロナ禍の春（※4）

大滝　保選　廃屋の狭庭の草花風に揺れ主の去りしを知るや知らずや（＊）（※4）

◎令和三年四月十九日

佐藤幹夫選　名を刻す指輪で特定されし友散りし砂漠禍祈る十回忌（※4）

井上菅子選　健診日謝りてなおわが腕に三度の針射す新人看護師（※4）

大滝　保選　亡き母の形見の日記に挿まれし彼岸の兄の記事の懐かし（＊）

◎令和三年二月二十二日

大滝　保選　雪纏（まと）い墨絵の如き裸木に重ねて憶（おも）えり新緑紅葉（＊）（※4）

＊：写真短歌」作品）　※1：山形県歌人クラブ第38集年刊歌集出詠（2020年）　※2：同会報74号近詠三首出詠　※3：同第39集年刊歌集出詠（2021年）※4：同第40集年刊歌集出詠（2022年）
※5：同第41集年間歌集出詠（2023年）※6：同第42集年間歌集出詠（2024年）

◎令和三年一月二十五日

井上菅子選　寄贈せし己が冊子の納まりし書架の一隅舞台のごとし（＊）（※4）

◎令和二年十二月二十一日

佐藤幹夫選　栗島に重なり見ゆる影月山出で合う幸をひとり噛みしむ（＊：吉田氏の写真）

大滝　保選　サックスの音に誘われ公園を辿れば若者壁に向きおり（＊）（※3）

◎令和二年十一月二十三日

井上菅子選　風情より取り外しの手間難渋に夏簾揺れはや秋の風（＊）（※3）

◎令和二年十月二十六日

佐藤幹夫選　「おとうさん」幼い文字の絵日記が不意に現るキャビネットの奥（＊）（※3）

大滝　保選　かなかなが呼び水となり虫時雨黄昏賑わい小夜へと向かう

◎令和二年九月二十八日

佐藤幹夫選　朝摘みのバジリコの葉を広げ干す狭き厨にアジアの香満つ（＊）

井上菅子選　郭公に野鳩加わりデュオとなる遠雷幽か半夏生の朝（※3）

◎令和二年八月三十一日

佐藤幹夫選　戦時下の「欲しがりません」浮かびくる新生活のメディアの喧伝（※3）

◎令和二年八月三日

佐藤幹夫選　山の路日の射す片方にハルジオン蝶と戯れ我を誘う（＊）

井上菅子選　白マスク一枚加わる衣更え初夏の風切り列なす自転車

大滝　保選　風そよぎ甘き香流るる山路にニセアカシアの大樹揺れおり（＊）（※3）

◎令和二年五月二十五日

井上菅子選　蕗味噌は春の使いと立つ厨レシピ片手に男の一品（＊）（※3）

大滝　保選　コロナ禍にインバウンドの災いし拡散止まらぬ日本列島（※2）

◎令和二年四月二十七日

佐藤幹夫選　なごり雪「これがそうか」と呟けり妻も頷く春の往還（＊）（※3）

◎令和二年三月三十日

井上菅子選　脚本の台詞の間合いに仕組まれて際立つ沈黙饒舌凌ぐ（※2）

大滝　保選　凍てし道粉雪の下に隠れおり歩みは摺り足ゴミを出す朝（※3）

＊：写真短歌」作品）　※1：山形県歌人クラブ第38集年刊歌集出詠（2020年）　※2：同会報74号近詠三首出詠　※3：同第39集年刊歌集出詠（2021年）※4：同第40集年刊歌集出詠（2022年）
※5：同第41集年間歌集出詠（2023年）※6：同第42集年間歌集出詠（2024年）

◎令和二年三月二日

佐藤幹夫選　薄墨の便りが届きまた一つ住所録から友の名を消す（※2）

◎令和二年二月三日

佐藤幹夫選　ひたすらに我癒されし「白い森」おぐにの秋の懐深し（＊）

井上菅子選　黄昏るる湖面に溶け込む秋の山墨絵にも似てこころ凪ぐ時（＊）（※3）

◎令和元年十二月十六日

佐藤幹夫選　山もみじ夕影受けて色まさり映る湖面は合わせ鏡に（＊）

大滝　保選　ハイカーの標（しるべ）ならんと咲き並び山路を誘うりんどうの群れ（＊）（※1）

◎令和元年十一月十八日

佐藤幹夫選　寺の秋茶会の前の挨拶は仏縁地縁の訛り溢れて（＊）（※1）

井上菅子選　風に乗り笛の音届く散歩道辿れば吹き手東屋に居り（＊）

◎令和元年十月二十一日

佐藤幹夫選　足元に蚊遣り焚きつつ登り窯の火入れ待ち居る窯主ひとり（＊：土田氏の写真）

大滝　保選　風鈴に虫の音加わりコンチェルト主役の代わりはや秋の風（※1）

◎令和元年九月二十三日

井上菅子選　十五歳父の遺骨を抱き帰る双葉町の墓に夏の日落ちき（※1）

◎令和元年八月二十六日

佐藤幹夫選　「寄り添う」の言葉の重さ比べ読む沖縄語る今朝の新聞（※1）

大滝　保選　山あいのオープンガーデン風そよぐ鮮（あざ）やぐ初夏を妻と頒（わか）てり（＊）（※1）

◎令和元年七月二十九日

阿部京子選　郭公の声のリレーに誘われ歩む山道こみどり萌黄（＊）

井上菅子選　銀竜草朽葉押し分け株立てり過客を癒す山の辺の道（＊）

◎令和元年六月十一日

阿部京子選（筆頭三席）　石蹴りの筋跡避けて草むしる桜の蕾ほころぶ公園（※1）

選評　自身の、幼いころの思い出が脳裏を過って生まれた心配りであろう。

ごはん時に遊びを止めて帰った記憶。明日の続きの為に「避けて」が効いた。

大滝　保選　山里の田舎芝居の幕の下り夜の帳（とばり）に桜舞い散る（＊）（※1）

＊：写真短歌」作品）　※1：山形県歌人クラブ第38集年刊歌集出詠（2020年）　※2：同会報74号近詠三首出詠　※3：同第39集年刊歌集出詠（2021年）※4：同第40集年刊歌集出詠（2022年）
※5：同第41集年間歌集出詠（2023年）※6：同第42集年間歌集出詠（2024年）

◎令和元年五月

井上菅子選　改元が紙面に躍り朝の雪解けて路面は煌めく鏡

◎平成三十一年四月

阿部京子選（筆頭一席）　めぐり来る建国記念日新聞に是非論載りしも遥かとなりぬ（※1）

選評　皇国史観で教育を受け、戦後全てを否定されて戸惑った。四大節の一つ「紀元節」を「建国記念日」と変えることに世論沸騰した頃への感慨を詠んだ。

大滝　保選　核を持つ国が他国へ求めたる放棄の論理に不条理覚ゆ（※1）

◎平成三十一年三月

井上菅子選　手織り機に横糸通す杼（ひ）の如く人を繋ぎてまちづくりなる

◎平成三十一年二月

大滝　保選　新聞を配りし人の自転車の轍（わだち）一筋初雪の朝

◎平成三十一年一月

阿部京子選　参道の日の斑を踏みて黄落に誘われゆく黄昏の道

井上菅子選　求人誌派遣やパートが幅利かせ先の読めない社会となりぬ（＊）

◎平成三十年十二月

阿部京子選　山頂の標識に残る忘れ物サングラスに映る秋の白雲（＊）

大滝　保選　千余段杖を頼りに登り来し人に応うる夕山紅葉（＊）

◎平成三十年十一月

阿部京子選　谷向こうに西日を受けて照るもみじ見つつ語らう老いの背ふたつ（＊）

◎平成三十年十月

阿部京子選　疾歩するハイカー独り馬の背の遥か彼方にはや秋の雲（＊）

井上菅子選　戦いの痕跡残る土塁脇鳥居の陰の群れ曼珠沙華（＊）

大滝　保選　高原の広場の隅に読書する人の傍らをアスリートら過ぐ（＊）

◎平成三十年八月

阿部京子選　姫沙羅の花弁に残るひと雫真夏の空の青映しおり

井上菅子選　日捲りの暦のごとく政策の消えては現れ言葉が躍る

大滝　保選　高原の藪を掻き分け進む先叢（む）れ咲く菖蒲（あやめ）に擦り傷忘る（＊）

＊：写真短歌」作品）　※1：山形県歌人クラブ第38集年刊歌集出詠（2020年）　※2：同会報74号近詠三首出詠　※3：同第39集年刊歌集出詠（2021年）※4：同第40集年刊歌集出詠（2022年）
※5：同第41集年間歌集出詠（2023年）※6：同第42集年間歌集出詠（2024年）

◎平成三十年六月

阿部京子選　春の暮の花散り果てし山里の黄昏時は緑のとばり（＊）

井上菅子選　お達磨の匂いやかなる江戸彼岸いにしえ人の心を映し（＊）

大滝　保選　地方にもインバウンドの波至り行楽の地に多国語溢る（＊）

◎平成三十年五月

阿部京子選　道の辺の祠の裏は春さなか日影うらうらカタクリ群れて（＊）

◎平成三十年四月

阿部京子選　参道の連なる日の斑に落ち椿御堂へ誘ふ 標（しるべ） となりぬ

井上菅子選　御堂へと続く参道雪積みて鳥居を前に佇み祈る（＊）

大滝　保選　一輪の流れ着きたる雪椿堪えぬきし冬を緋に秘めており（＊）

◎平成三十年二月

阿部京子選　霧の朝佇む岸辺凍みこごり鳥の一声静けさを裂く

井上菅子選　中東で散りし友らの七回忌雪の凍む朝この地で祈る

大滝　保選　恒例の暮れの作業の近づけり竹馬の友の名リストより消せず

◎平成三十年一月

阿部京子選　一病とつき合いてはや半世紀遊行の門への錫杖とせむ

◎平成二十九年十二月

阿部京子選　散りもみじ甦らせて水の面は新たな舞台漣もなし（＊）

井上菅子選　街中の空家の庭先山とあるくらしの品の朽ちゆくが見ゆ（＊）

◎平成二十九年十一月

阿部京子選　猫じゃらし路肩に揺るる田舎道踏む松落葉足に優しき

大滝　保選　幸せのきざしか突如の二重虹雨の上がりし刈田に架かる（＊）

◎平成二十九年十月

阿部京子選　荒沼に墨絵の時間流れきて湖の面は鏡の舞台（＊）

井上菅子選　リリリリリ白露の宵の暗がりの音色に応ふる仲間のリリリ

◎平成二十九年九月

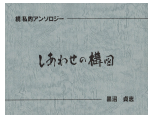
阿部京子選　帰国せしパリの友との語らいの話題いまだに原発震災

＊：写真短歌」作品）　※1：山形県歌人クラブ第38集年刊歌集出詠（2020年）　※2：同会報74号近詠三首出詠　※3：同第39集年刊歌集出詠（2021年）※4：同第40集年刊歌集出詠（2022年）
※5：同第41集年間歌集出詠（2023年）※6：同第42集年間歌集出詠（2024年）

井上菅子選　草花を巡りて出で逢ふ酔芙蓉口遊みけり「風の盆恋歌」（＊）

大滝　保選　久々に友と語らふショットバーカクテルグラスに汗の伝ふる

以下（平成２６年３月～平成２９年７月）の５２首は平成２９年１１月発刊の冊子「続私的アンソロジー“しあわせの構図”」に掲載しております。



◎平成二十九年七月

大滝　保選（筆頭一席）　断捨離の成果の箱を古書店へこころ残りの帰路はたそがれ（＊）

選評　断捨離とばかりに箱一杯の古本を出したが、後悔の念も消えない。結句の「たそがれ」は「人生の黄昏（たそが）れ」の心象でもあろう。気持ちの分かる歌。

井上菅子選　松蝉に蓮華つつじが色を添へ谷地沼にはや夏のよそほひ（＊）

◎平成二十九年五月

井上菅子選　待ち切れぬ心たずさえ春探しぬかるみ避け行く城址の小路

大滝　保選　大根のおろしのごとき雪積る卒業式の朝の通路に

◎平成二十九年四月

阿部京子選　春の日の射し込む御堂に祈りおり耳を澄ませば雪解の瀬音

大滝　保選　目覚めれば鳥の囀（さえず）り耳に入る障子明るく春をうつせり

◎平成二十九年三月

井上菅子選（筆頭二席）いつからか知己の名探す「おくやみ欄」

思い湧きいづわが名の載る日（＊）

選評　歌に詠んだことはないが同じ思いをしたことがある。という人は多いはず。知己の名探すからわが名の載る日までの軽やかな調べに、重い内容が救われる。

阿部京子選　行き暮れて辿りつきたり道の辺のコンビニにはや夕光（ゆうかげ）は射す

◎平成二十九年二月

大滝　保選　新学期子らの弁当始まりぬ朝の隣家にたまご溶く音

◎平成二十九年一月

阿部京子選　生活の脚の手立てを置き去りに免許返上ひとり歩きす

井上菅子選　寒風を割きて上れる噴水は暮と広がり山裾隠す（＊）

＊：写真短歌」作品）　※1：山形県歌人クラブ第38集年刊歌集出詠（2020年）　※2：同会報74号近詠三首出詠　※3：同第39集年刊歌集出詠（2021年）※4：同第40集年刊歌集出詠（2022年）
※5：同第41集年間歌集出詠（2023年）※6：同第42集年間歌集出詠（2024年）

◎平成二十八年十二月

阿部京子選　小走りに園児らがゆく黄葉路あいさつ響く霜月のあさ（＊）

◎平成二十八年十一月

井上菅子選　薄暗き朝の目覚めに鳩鳴けりクウクウククク秋はきており

大滝　保選　涼求め車で走るすすき道フロントかすめあきつ群れ飛ぶ

◎平成二十八年十月

阿部京子選　新涼は行きつ戻りつ庭先の虫の世界へ秋の往還

◎平成二十八年九月

井上菅子選　早苗饗のテレビ映像眼に留り忽と戻りぬ少年の頃に

大滝　保選　あさまだき目覚めの一杯の白湯（さゆ）旨し備忘録記（しる）す手も捗りぬ

◎平成二十八年七月

井上菅子選　管理下と言われて久しきフクシマの海は黙してメディアが語る

大滝　保選　雪残る霊峰を背に芝ざくら覆える堤は王朝絵巻（＊）

◎平成二十八年六月

阿部京子選　公園の軋んで揺れるブランコに遊んだ子らの気配が残る（＊）

◎平成二十八年五月

井上菅子選　今の世に広まる「絆」気に留まり「枷」の意味もつ「ほだし」の読みしる（＊）

大滝　保選　いつよりか「世話にはならぬ」が揺らぎをり遠くに暮らす娘と語れば

◎平成二十八年四月

阿部京子選　淡雪がうすく積もれる朝の道足跡ひと筋わが先にあり

井上菅子選　雪の道手を取り歩む老いふたり交はす笑みにもにじむ年輪

◎平成二十八年三月

阿部京子選（筆頭一席）　雪原を一輛列車進み行く女子高生のにぎわい乗せて（＊：長谷川氏の写真）

選評　過疎地をつなぐローカル線の通勤通学時にのみ賑わう一輛の情景。簡潔にまとめられた。評も簡潔に終わる。

井上菅子選　屋根を打つ微かなる音に心解く雨水間近い目覚めの朝に

＊：写真短歌」作品）　※1：山形県歌人クラブ第38集年刊歌集出詠（2020年）　※2：同会報74号近詠三首出詠　※3：同第39集年刊歌集出詠（2021年）※4：同第40集年刊歌集出詠（2022年）
※5：同第41集年間歌集出詠（2023年）※6：同第42集年間歌集出詠（2024年）

大滝　保選　たまさかの妻の不在に慣れぬ家事先行き危ぶむ思い湧きいず

◎平成二十八年二月

大滝　保選　起業よりはや十五年廃業の意思を固めぬ勤労感謝日

◎平成二十七年十一月

阿部京子選（筆頭三席）　遠き山近き紅葉を水面に浮かべて池は秋の万華鏡（＊）

選評　遠景、近景すべてを映す水面の華やかさを「万華鏡」と捉えた。
心の動きに雑念がなく直線的な描写が心地よい。

井上菅子選　いつからかシルバーウィークと呼ばれおり老いを敬う想い遠のく

◎平成二十七年九月

井上菅子選　かなかなの途切るる声にかなかなと遠くで応えるかなかなの声

大滝　保選　フェンス越しのプールで挙がる歓声に幼き日々の想い出湧き来

以下の２０首は平成２７年１１月発刊の遊縁の衆の歌集「遊縁」に掲載しております。

◎平成二十七年七月

井上菅子選　祭りへと歩みを揃う親子連れすがしき初夏の山間の道（＊）

◎平成二十七年六月

阿部京子選　戦争を知らない世代が世の中を動かす社会いつか来た道

◎平成二十七年五月

井上菅子選　懐かしきむかしのテンポよみがえり委ねて歩む都心の雑踏

◎平成二十七年四月

阿部京子選　ウェブサイト食のレシピが溢れおり貧しき時代遥かとなりて

◎平成二十七年三月

井上菅子選　十年の歩みを話す機会得て浮かび上がりぬマイライフワーク

高橋光義選　雪いろの町を歩めば甦る遥か昔の通学の路

◎平成二十七年一月

井上菅子選　枯れ野原春の彩まぼろしに黄昏早く秋が身に染む（＊）

高橋光義選　高齢と言えども今はタブレット連れ合い待たせて画像に残す（＊）

＊：写真短歌」作品）　※1：山形県歌人クラブ第38集年刊歌集出詠（2020年）　※2：同会報74号近詠三首出詠　※3：同第39集年刊歌集出詠（2021年）※4：同第40集年刊歌集出詠（2022年）
※5：同第41集年間歌集出詠（2023年）※6：同第42集年間歌集出詠（2024年）

◎平成二十六年十一月

井上菅子選　新幹線車窓の先の錦秋に思わず止まる弁当の箸

◎平成二十六年七月

井上菅子選　会合を終えたる昼を軒先の燕話題に再び賑わう

高橋光義選　木漏日がいざなう小道その先の休みどころにひとの気配なし（＊）

阿部京子選　主去りし家の庭先草繁し人の気配の露もとどめず

主去りし家の庭先草枯れて人の気配の露もとどめず（＊）

◎平成二十六年六月

阿部京子選　春蘭にまた逢えたねと声かけぬ春まだ浅き山路の片方（かたえ）（＊）

高橋光義選　春寒し蝶もしばしの羽根休み山の小径の陽だまりの中（＊）

◎平成二十六年五月

井上菅子選　春の彼岸に残雪踏みて墓掃除想い往き交う彼岸と此岸

高橋光義選　地鎮祭願い通じて雪の止み友の住居に祝詞流るる

◎平成二十六年四月

阿部京子選　誰そ彼が黄昏となる万葉の世界にひたりひとを想えり（＊）

高橋光義選　精検を待つ間の長さ息苦し交わす目線に共感覚ゆ

◎平成二十六年三月

阿部京子選　風邪に臥し久々に見る夢の中母の十八番の懐かしき粥

井上菅子選　冬の列車は吹雪く山あい割きて行く向う先にはフクシマの街（＊）